

「大阪芸術大学およびその周辺の『場』の研究」
- 自然科学と芸術の融合の試み -

研究年度・期間：平成6年度～平成7年度

平成6年度

研究代表者：北村 文雄

(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実

(環境計画学科 講師)

共同研究者：伊藤 隆 齋部 哲夫

(工芸学科 助教授) (美術学科 助教授)

下村 孝 足立 正毅

(環境計画学科 助教授)(工芸学科 講師)

神原 哲夫 佐々田美雪

(美術学科 講師) (工芸学科 講師)

柳楽 隆一 山本善一郎

(美術学科 講師) (美術学科 講師)

平成7年度

研究代表者：北村 文雄

(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実

(環境計画学科 講師)

共同研究者：伊藤 隆 齋部 哲夫

(工芸学科 助教授) (美術学科 助教授)

下村 孝 足立 正毅

(環境計画学科 助教授)(工芸学科 講師)

神原 哲夫 佐々田美雪

(美術学科 講師) (工芸学科 講師)

柳楽 隆一 山本善一郎

(美術学科 講師) (美術学科 講師)

研究経過の概要

本研究は大阪芸術大学が立地する「場」に存在する様々な物を研究対象とし、時間軸および空間軸の両面から自然科学(生物学、古生物学、生態学、地質学)的および人文科学(芸術、考古学、歴史学)的な調査研究を行ない、研究者と作家が共同調査や討論を通じての総合化(作品化)をはかることにより、芸大が立地する「場」のアイデンティティを明らかにすることを目的としていた。

本年度は以下の活動を行った。

調査：4月と5月に主として芸大の裏山や周辺地域(敏達天皇陵や石川)で植物および魚類の調査をおこなった。

講演会：11月29日に芸大周辺地域の地質の専門知識を得るために、大阪芸術大学環境計画学科非常勤務講師秋元宏氏(地形・地質学)を招き、「大阪の地質と地形」というテーマで勉強会を開催し、知識を深めた。

文献の収集：本研究テーマに関連した地質学、考古学、歴史学の論文、パンフレット、刊行物を収集した。

総合化と展示会の開催：調査により得られた資料は全員で整理(標本作成)する中で、形態や構造の観察を行い、創造活動の糧とした。研究者は得られた資料を学術的に整理し、作家は得られた資料から触発されて作品を制作した。これらの成果は、5月9日～15日に芸術情報センターで開催した「芸大の過去と現在：多様性とかたち」展(24頁写真)で公表した。

ニュースレターの発行：これまで調査した結果を芸大教職員・学生に知らせるために情報誌「東山 469 - 芸大周辺の博物誌」の創刊を企画し、12月初旬より数度の編集会議を開いて討議した結果に基づき、1月29日に第1号を1000部発行した。

研究成果について

以下のような研究成果を得た。

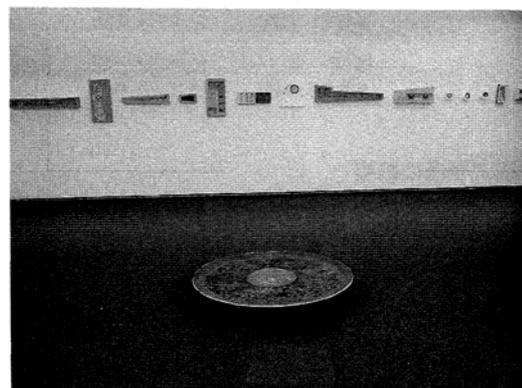
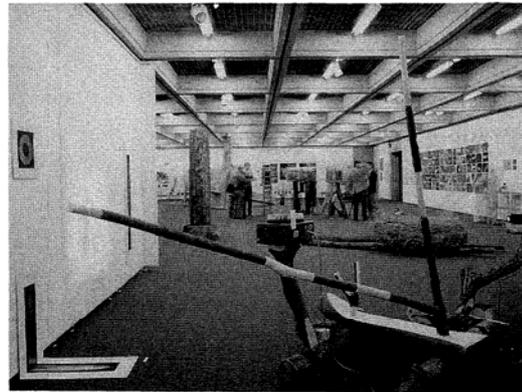
調査：《植物》4月に当時第2校区工事で開発中の丘陵地帯を中心に植物の調査を行ない、樹木の花、樹皮および草本植物の生態を写真撮影した。引き続き目録の充実につとめた。希少となったササユリ、コクランなどの生体標本を得ることができた。

《魚類》4月に石川の河南大橋付近を中心に魚類相を調査した。フナ、オイカワ、ウグイが得られたが、期待された何種かは採集できなかった。これは、昨年度の異常渇水によるものか、それとも河川の汚染など環境の変化によるものか、今後も調査を続ける必要がある。

展覧会：この展覧会の目的は、大阪芸術大学が立地する場所に空間的と時間的に存在する「もの」の調査を行い、標本の展示と解説および「もの」から触発された作品写真「芸大の過去と現在：多様性とかたち」展の展示をとおして、芸大の立地する場所は

どのような所かをそれぞれの専門の立場で表現しようとしたものである。展覧会のタイトルは「芸大の現在と過去：多様性とかたち」展とした（写真）。芸大の立地する場所を3つのキーワード：森、水、地で示される要素に分け、それぞれの要素について現在および推定される過去の状況を生物（植物、昆虫、鳥、魚）の標本（生体標本も含む）や写真、遺跡や遺物の写真、作品の展示で表現しようとした。展示標本および作品は以下の通りである：Ryuzo と刀（彫刻）、芸大の航空写真（現在と20年前）、パノラマ写真、東山遺跡の写真と地図、修羅（作品）、昆虫標本と標本箱、動植物の生態写真、植物の巨大さく葉標本（作品）、樹皮の写真、植物の生態標本、さく葉器（作品）、昆虫と鳥類の巣、Su（作品）、fossil（作品）、触・蝕（作品）、芸大池の現在と過去の魚類・水生生物相、石川の魚類、水槽（作品）、カブトエビとマミズクラゲ標本。

ニュースレター：読みものおよび研究成果の報告を主体とした8頁の冊子とし、学内および関連の機関に配布し、好評を博した。



研究の反省

5月の展覧会の準備のため、生物の調査、特に春に発生する昆虫類や野鳥の調査が十分でなかった。昨年と同様、考古学や地質学の調査が不足していた。展覧会はアンケートによるとおむね好評であったが、「解説が不足している」「展示の意図がわかりにくい」と意見もあった。今後の展覧会では展示や解説の方法について十分な検討を行いたい。

今回の作品を共同で討議しながら作りあげるということは、新しい試みであるが、必ずしもうまく機能したとは言い難い面もあった。今後この試みの可能性について検討する必要がある。